# 北越産業 第四のライン、タングステン複合リーダーを上手に使いこなす Hokuetsu

◉強度や比重でナイロン、フロロカーボン、PEをはるかに上回る第四のラインは高強度、高感度、高比重の素材「ポリアリレート」を採用。アユの友釣りで培った技術は、海釣りの世界でも徐々にファンを増やしている。

今回紹介したヒラメ釣りでは、道糸に「第四のルアーライン」、ハリスに「第四のボーダレスハリス」を使用。一部親バリ、孫バリの接続に「タングステン複合リーダー」も使用した。いずれも潮切れのよさ、沈みの早さに加え、感度アップも確認され、ヒラメ釣りでの好釣につながった。

▲道糸には第四のルアーライン1号、イエローを巻いてある

## 第四のルアーライン

★高比重、高強度の素材ポリアリレート採用の道糸。4本から最大8本ヨリで仕上げ、素材の滑らかさも追求。伸度3.2%、比重イメージ2のハイブリッドライン。今回は道糸用として1号を使用。

**Spec**:0.2(6)、0.3(7.5)、0.4(9)、0.6(16)、0.8(20)、1(25)、1.5(35)号の各種。号数により100、150、200、300m巻きを用意。カラーはレッド、ホワイト、イエロー、価格はオープン。

## 第四のボーダレスハリス

★同じくポリアリレートの特長を活用したリーダー。軟らかく、吸い込みやすいしなやかさを持つ軟質軽量リーダー。魚に警戒心を与えないダークレッド、ダークグリーン。今回はハリス～孫バリまで4号通し、タングステン複合リーダーとの併用は1号を使用。

**Spec**:0.2(5)、0.3(7)、0.4(9)、0.6(12)、1(18)、4(60)号の各種。長さ各30m巻き、価格はオープン。

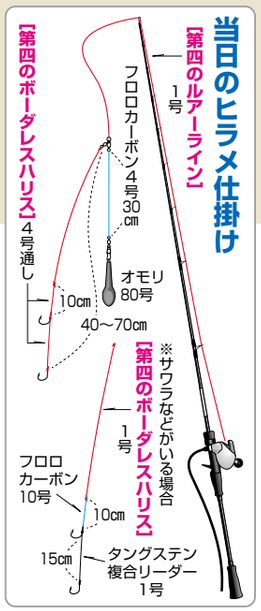
## タングステン複合リーダー

★タングステンとポリアリレートの複合ライン。高比重、高感度で根ズレや鋭い歯にもビクともしない強度を誇る。タングステンは結べないという常識を翻し、リーダーやハリへの結節も可能。

**Spec**:0.2(5)、0.3(6.5)、0.4(9)、0.5(11)、0.6(13)、0.8(15)、1(17)、2(34)、3(44)、10(113)号の各種。長さは各10m巻き、カラーはダークレッド、ダークグリーン、価格はオープン。

※Specの( )内はマックスポンド数

### 当日のヒラメ仕掛け



▲平野さんグループは右舷に並んだ
▼園部氏は豪快に竿を曲げて、良型を取り込む

★メンバーは各自1～2枚は良型を釣っていた

★朝の1投目から竿を曲げる平野さん。これはほんの序章だった

# ヒラメ釣りに第四のライン

## 茨城県鹿島港出船のヒラメ釣りより

## 感度アップと潮切れのよさ手返しアップで差を付けろ

◉第四のラインでおなじみの北越産業では、昨年から沖釣りでの有用性をアピール、様ざまなターゲットでの実釣を繰り返し、徐々にファン層を広げている。今回は解禁したばかりの茨城県鹿島沖のヒラメに、同社の製品を使用した釣行の模様をお届けする。

★タングステン複合リーダーならハリが軟まれても切られにくい

▲ボーダレスハリス4号を使った仕掛け
▶ラインが縮れたら瞬間接着剤を垂らして引っ張ると回復する
◀メンバーは北越ラインを色いろ使い分けての釣りだった

茨城県エリアのトップを切って解禁した鹿島沖のヒラメ釣りに、北越産業の平野和之さんを中心とした釣り仲間9人が第四のラインシリーズを持参して釣行した。

「強度があるので、PEやフロロカーボンよりかなり細めの号数が使えます。ヒラメ釣りで使用すると、色いろな利点が見えてくるはずです」と平野さん。

不動丸の右舷に並んで席を取り、5時過ぎに出船。30分ほど走って船長が船を止めたのは60メートルダチの深場。合図とともに一斉に投入すると、着底と同時に早くもあちこちで竿が曲がる。まるでヒラメが口を開けて待っているかのようだ。

船長、仲乗りさんもタモを手に大忙し。バタバタと上がったのは1キロ前後メインに2キロ級の良型交じり。ひと流しでなんと船中10枚ほどのヒラメが取り込まれた。

「こうした深場こそ潮切れがいい第四のラインの出番です。うちらのメンバーはそれほどオマツリしてないし、ヒット率がよかったのも感度のおかげだと思います」と言いながら平野さんはソゲクラスを取り込んで苦笑い。

次の流しからもヒラメの食いは収まることがない。手返しよく釣る人はひと流しで2枚、3枚と釣っていく。1キロ前後が中心ながら、時おり2～3キロ級も交じるから油断はできない。

「ヒラメ釣りでは1枚釣ったらハリスをチェックして、少しでも傷ついたら交換するものですが、ボーダレスハリスや複合リーダーなら再使用が可能、そのぶん手返しが早くなるわけです」

平野さんは朝イチの深場で7枚を釣ってしまった。ほとんどの方が型を見た8時前、船は灘寄りの水深30メートルラインへ移動する。

このポイントでも朝のような派手な食い方ではないにしろ、流すたびにどこかで竿が曲がる状態。歓声と笑い声の絶えない状態は納竿まで続いた。

この日の不動丸は5隻のヒラメ船が出船。平野さんグループの船は0.5～3キロを3～10枚、トップ10枚は5人。ゲストもイナダ、ソイ、マゴチ、ハタなど多彩。別船では7.2キロの大判も上がっており、鹿島沖の魚影の濃さを改めて感じさせる釣行だった。

今回平野さんグループは初めての方も含め、全員がクーラー満杯の大釣り。「第四のラインを初めて使う人も何名かいて、それぞれ気に入ってくれたようで何よりです」と満足げに船を下りる平野さんだった。

◉Presented by Hokuetsu　問い合わせ=北越産業 ☎0250・68・2423

◉取材協力=茨城県鹿島港・不動丸